

この人と30分

ぶらり訪問⑭

未来構想の実現
に向け

静岡県家具工業組合

理事長 実石貞次 氏



■プロフィール

大正15年生まれ。昭和18年陸軍航空通信学校を卒業後、19年百飛行団配属、32年東海家具製作所創業、39年東海家具工業㈱に法人化し社長に就任。48年合弁会社PTスリー・トーカイ・インドネシア設立。現在静岡商工会議所副会頭、全国家具組合連合会副会長でもある。趣味は旅、最近読んだ本「小説 上杉鷹山」、信条「力一杯生き抜きたい」、血液型O。

訪問インタビュー第十四回は、県家具工業組合・実石貞次理事長。去る二月初旬、ご多忙の実務の合間をぶらり訪問。急速に進む国際化の中、家具業界の針路をお話し願った。

流通基地、リサイクル、職人村

Q、当面の組合重点事業は？

二一世紀においても活力ある家具産地であり続けるため、三年程前から行政や研究機関の支援も得て、「二一世紀未来構想」を検討しており、構想の柱は三本あります。

その第一は、現在メーカー個々が行っている配送を合理化し、流通コスト低減をはかると共に、今後の国際化進展に対応した輸入家具の通関、保税業務等も処理する「国際家具流通基地構想」。

第二は、買替えサイクルが長く、廃棄処分が困難な下取り家具の引き取り運送を前述の流通基地構想にリンクさせ、粉砕再利用する「資源リサイクル工場構想」。

第三は、四百年にわたる静岡の指し物技術を伝承し、量産家具にはない独自の手作り家具の生産を支援する「小集団工場団地構想」（近代的な職人村）です。

提案機能強化も

Q、住空間産業の中の家具は？

昨年来住宅の着工が堅調の割に、家具

業界へ良い影響が出ていません。その理由のひとつにキッチン、収納家具等家電メーカーやハウスメーカーのセツト販売があります。さらに住宅建築予算に手一杯で、家具の買い替えまで余裕がないというのが実情でしょう。

前者については、施工含みの住空間産業への新規参入もありましょうし、インテリアアプランナー、コーディネーターといった新しい職能と連携した総合的な提案機能強化も必要でしょう。

後者については「住宅金融公庫の融資枠に家具購入費の一割上乘せ」を静岡で提案し、全国レベルの運動として関係機関に働きかけています。

国際化と物づくり

Q、静岡産地の現状と展望は？

組合員は現在二一五社。二兆円の家具市場における本県のシェアは十％弱（約一千六百億円）で、愛知、福岡などと共に全国のトップクラスにあります。しかしながら、価格訴求品の大量供給と生産過剰という構造不況に加え、輸入家具が漸増し約一割のシェアを占めるに至り、県内産地は大きな曲がり角にあり、今まさにリストラを求められています。

量産される商品分野では、生産拠点を海外に移し、産業の空洞化現象は現

実問題となっています。ただ技術力の高い、感性のあふれた商品や大きな箱物は国内で作り続けられると思います。いわゆる国際化には製品輸入、パーツ輸入、現地企業との共同開発・技術提携の三つがありますが、海外でノックダウンしたものを国内で組み立てる形式は今後共増え続けると思いますし、各企業が進めねばならないでしょうね。

生かしたい国産針葉樹

Q、木材業界に向けてひとこと？

十年程前、カリマンタン、スマトラ出張後、春野町に出掛け、杉松の植林地を訪れたことがあります。今ではあの山林が既に伐採期にきていると聞きました。

現在、家具用の針葉樹ではベイツガが多用されていますが、杉松も利用できないか検討すべきでしょうね。ハーブ面では死節の化学処理など加工上の問題、ソフト面では節を生かしたデザインなど、相互に努力すべきことがあります。特に公共の学童机使用などは、もっともっと関係機関に要請して突っ込んでゆくべきでしょうね。

国産針葉樹が四十〜五十年サイクルで安定供給されれば、頭を下げて外国から材料を買わなくても済みますから。